
嫌われ者

千原樹 宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嫌われ者

【Nコード】
N5102P

【作者名】
千原樹 宇宙

【あらすじ】
会社内の嫌われ者、木村 卓也の生態

嫌われ者

嫌われ者

作 千原樹 宇宙

この会社は、会社では無い。会社といいながら、内実は閉まりきっていない、だらだら流れ落ちる蛇口の水のように、完全に弛緩しきっている。この会社は元々国营企業だったが、民営化されて既に数十年が経つにも関わらず、人員だけでも全国数十万人もいるが、図体ばかり大きくて、大企業どころか小企業でしか無いのが現実の企業実態だ。この会社に勤めて勤続40数年を務めて定年前に辞めてしまった俺に、再雇用の問い合わせがやってきたのは、去年の暮れだった。

何故定年前にこの会社を辞めたかは、誰にも話してはいない。理由は、あまた数えればきりが無いくらいに在る。仕事に精を出して仕事のせいで痩せ細り、枯れた枝葉のように捨てられ死にたくは無かったし、成績を上げる度に、課の上司や同僚からの嫉妬の嵐の中の仕事は、意欲も性欲も削ぎ落される事にほとほと疲れたからでもあるし、自由を求めたかったからでもあるし、病気のせいでもあるし・愛人も欲しかったし・

所詮、勤続40数年務めたがだ、代わり映えないサラリーマン

の生涯に嫌気をさしたのも、辞めた理由の一つになるだろうが、これといった真の理由は自分でも分からないでいるのが、現状だ。そこに、辞めて、別な官庁法人に就職して一年が過ぎようとしていた時に、

「手を上げてくれえ」と、再雇用の話が向こうからやってきた。

・・・受けなければ・・・良かったんだ・・・

こうして、再雇用で又再び同じ職場に通いだした今でもそう思う。誰にも教えていない固定電話に、每晚深夜にかかって来る一回の電話の音に恐怖する。女房も、同じに恐怖している。

「どうして、彼に電話番号教えたの？」

「いやね、こんな事になるとは思ってもいなかったんだよ」と、妻に言うのが朝の日課になってしまった。

電話がかかってきた朝の会話は、殆どいつもの繰り返しだ。

死んだ親にも、愛人にも教えていない電話番号を教えたのは、会社の非常勤？の「木村 卓也」という男だが、芸能人のキムタク等では無いただの日本人だ。

因みに俺に、愛人がいるというのは、全くの嘘なのだが、いるって事にしておく。愛人の名まえは、徳子という事にしておくが、ひょっとして、犬かもしれない。追っての楽しみだ。

定年退職してからは毎日毎日パチンコに明け暮れ、失業保険金は全て北朝鮮の鉄砲の弾になってしまった。分かっているけど止められない止まらないギャンブルだ。それでも、競馬だけは止めた、止めた。何故かという、恥ずかしい話なんだが、女房に内緒で貯めていた金二百万を持って、行きはよいよい帰りは、怖い、恐ろし

い、あれは、思いだしても悔しい20年前――福島競馬場に行つて大勝負。

あ――思いだただけで、悔しさで、失恋した時のあの心に巨大な穴が空いたような虚脱感、今でも胸が焼け野原になつてしまうほどだ。

勝負したんだ。これはと決めてきた、あのお馬ちゃんに50万円ずつ、4回の勝負、複勝狙い。結果は、3回まで大外れ――

・・・さ・最後の50万円・・・一番人気の単勝180円・・・これは堅い・・・絶対に来る・・・よしこれだ・・・これは絶対だ・・・

結果は、当然・・・外れた、外れたんだ・・・気がつけば、財布に入っていたお金は、15円だった。

・・・せ・・・せん・・・仙台に・・・帰れない・・・ひやああ――

あの時は焦った、マジに焦った。仙台に、帰れないなんて、それもギャンブルに負けてお金を使い果たして、仙台に帰れないなんて、人にも女房にも言えるわけがないし、在つてはならない事だったが、いかんせんそれが現実だった。

・・・仙台から来ている・・・誰かを見つけなくちゃ・・・

競馬場の中を、歩きまわった。やっと、やっと、見つけた。あの時ほど、嬉しかった事は無い。それ以来、競馬は止めたんだ。

深い反省のもとで、次の日から、真面目な男になったと思うだろうが、確かに競馬は止めたが、仕事帰り道に不思議な事に、何軒ものパチンコ屋が在ったのである。何故。在るんだろう、パチンコ屋が。これは、北朝鮮の陰謀なんだろうか、今でも、疑問だが、あの大敗北以来、競馬は止めたが、パチンコだけはやっている。

昨日も、パチンコ屋に貯金をして来た。通称「払い戻し不確定定期預金」と言うのである。ちよくちよくと小金を払い戻すが、俺の一番悪いところは、そのお金がいつまでも懐に住んでいない事である。

そう、全部使ってしまうのである。だから、退職金は、全部女房に預けて手をつけないでいる。現在の給料の半分はお小遣いとして、女房に貰っているのであるが、昨日、お小遣いを全部パチンコ屋に置いてきてしまった。

・・・こ・・・今月の・・・金が無い・・・給料日まで・・・後・・・
24日もある・・・あいや・・・

会社

「おはようございます、昨日、どうでした、檜瑯さん？」と、近頃、朝の休憩室でよく話す仲井さんが聞いてきたので、

「置いてきた、全部、置いてきた・・・もう今月無いわ・・・」と、顔をひきつらせて、無理に笑顔を見せて、静かに言くと、

「あいちゃー全部って、給料全部ですか？」と、覗きこむように聞いてきた。

「うんだつちゃ・・・」

「あいや・・・」と、口を噤んだのは、仲井 将弘という同じ班の仕事仲間で、身分は期間社員？だが、実質はアルバイト、年齢は55歳くらいのなかなかの色男で、若い頃相当に女を抱いてきたよ

うな感じの人間だ。多分今でも、女性をナンパしているのであろう。彼の口癖は、「身分はアルバイトだ」。期間雇用社員なんて言ったら、所詮アルバイトだが、何故かボーナスも一応出るし、社会保険も入れて貰っている、有りがたいそんな会社だ。

俺は、草凪 檣瑯という名前で、会社ではいつも檣瑯さんと呼ばれている。当然再雇用の仕事だから、先輩として、結構気を使っているのは事実だ。煙たがれているのはよく分かるから、出来るだけ口出しはしない事にしている。そんな中でも、この仲井と言う人間とは、結構、色々在ったが、それは民間出身の人間と公務員体質の人間の違いによる誤解に基づくもので、今では、会社内ではよく話す方だが、友人ではないし、あくまでも仕事上の付き合いだけだ。

この歳になつて友達なんか出来やしないし、この仲井という人間も、完全に線を引いている人間だ。自分の事は何一つ言わないし、口も堅い。その唯我独存、唯我独尊的なというか、他人を信じないとか、なかなか他人になじまない性質の人間だったが、慣れるに従つて俺の誤解だった。

再雇用者として、内勤を望まなかったのは、正しい判断だったと今でも思っている。会社の中にとくと、社員の後輩達が、煙たがるのが目に見えて分かる。それでなくても、組合活動を若い頃かなりやったものだから、出世も出来ずに定年前に退職した俺が煙たいに決まっている。

だが、出世は出来なかったが、金は稼いだ。現職の時の社員の給料はせいぜい20万から30万くらいの時に、俺は、成果報酬も入れて、年収一千万を越えていたから、当時から、独立した個人商店的な考えを持っていた。

だから、競馬もパチンコも、ゴルフも、何でも楽しんできた。誰にも迷惑をかけずに子供を3人育てて、この歳を迎えたのである。もちろん、女房には内緒で女遊びもしたし、世間で言われるところの愛人等も……出来なかった。愛人は流石に、無理だった、

何せ真面目を画に描いたような人間だったのである分けがない。

遊びました。夜の国分町で、遊びました。

それを助けてくれたのは、ゴルフだった。当時から、公務員がゴルフをするのは、問題視される風潮があったから隠れてやっていた。腕は、シングルなんてものじゃなく、セミプロ級だった。だから、仕事に、ゴルフを徹底的に利用したし、ゴルフを通して知り合った社長連中との付き合いで、副次的に国分町の夜の社交界のママさんや怖いお兄さんとか知り合えた。

仙台の国分町で遊ぶなら、絶対、このような人脈が必要だ。ぼったくりの店が、若い頃お流行りだった。今でもそうらしいが、退職と同時に、病気が、つまり腰の病気で昼の社交界のゴルフや、夜の社交界への出陣は、無くなって久しい。徐々に、腰を治して、ゴルフをしたいと思っではいるが、いかんせんもう老体である。

仕事の内容と言えば、小包を集めて、若林区の卸町にある鳩ポツポパック通称鳩パック集荷センターまで、午前と午後一回決められたコースを廻る仕事だ。

本来再雇用の場合、元の仕事に戻るのが原則だが、集荷センター業務を選択したのは、ここの上席課長のたつての依頼からだったが、受けた事を直ぐに後悔したのは事実だ。

全然、全く、何もかも、以前の職場と違っている。以前の職場には、何とも言えない張りつめた空気が職場を支配し朝から空気が重かったし、成績次第で全てを決定される能力給が基本だから、同僚に甘える事などないし、尚且つ先輩後輩の上下関係が厳しく、規律があり、互いの競争の為に悠長に構える等出来ない職場で、毎月、しのぎを削るのが習い性になって、それが、ごく当たり前の事だと思ってきたのに、呆れた事に、ここの集荷センターには、規律らしいものが何一つも見当たらない。正しく、ぬるま湯状態の仕

事場だ。総勢百人近くの人間が働いているのに、規律らしいものは何も無い。入って直ぐに後悔したが、辞める分けにもいかず二年が経とうとしている。

俺の所属は、集荷センター集荷営業―第8班通称CVS班。仙台市内に数あるコンビニエンスストアーから出る小荷物通称鳩パックだけを集荷する仕事だ。班の人数は総勢九人であるが、俺より一年早く入社した、非常勤Aの木村 卓也という独身で、年齢は40歳、頭が薄く、内股歩きの踵を引きずって歩く、メタボな男が次々、トラブルメーカーになるとは、これから書く事は、いない筈の「神」に誓って、真実だ。

因みに、知り合いの大工の棟梁が言っていた言葉が、この男の歩く姿を見た瞬間思い出した。

「踵を引きずって歩く人間は、使い物にならない」と。つまり、だらだらと踵を、足を地面に擦るような歩き方をする人間は、建築現場では、仕事をする基本的な大工という資質に欠ける、役に、立たない、使い者にならないという事らしい。だから、その棟梁は、弟子にする時には、歩き方を見るそうだ。

読者のお子さんに、だらだらと脚を地面に擦って歩くようなお子さんがいたら、ガキの頃から、口から炎を吐きながら、矯正させるべきだ。つまり、他人というか、社会の一線で働いている人間達は色々な角度で、人間を見分けていると思って間違いない。ただ、黙って、評価して、黙殺しているだけだ。

自分に会社に役に立たない人間は、疎外されているんだという事を、分かっていない人間が、特に、若い者達に多い、等と書けば、この年寄りが言うだろうが、実際、そうなんだから仕方がない。

このCVS 班の中に、紅一点、藤原 徳香という女性が何故かいたんだ、現在は揉め事が在って、他班に移ったが、仲井 将弘さんと現在でも仲が良く、あの二人は出来ているとの評判が、否、俺はそう思っていたが、この仲井さんと言う人間はそのような人間

では無かった。たった一人で、班の連中というか若い者達のボス的存在の木村 卓也に毎日、事あるごとに苛められていた女性、藤原 徳香の味方を最後までしたのが仲井さんだった。この木村と藤原 徳香との抗争は、全く、ガキの喧嘩みたいで、見苦しかったが、何故そうなのかは、後から聞いて分かった。

この女性、年の頃は、俺の観測によると40〜42歳くらいと踏んだが、この徳香お嬢さん、全く、自己中心、世界は自分が廻しているような呆れたほどの、何でも、私、私、私は、私が、私の、私に、私をのオンパレードの女性である。全てが、私の人間だ。

そして、何と言つても、素晴らしいのは、その物おじしない態度、失敗すれば、笑って誤魔化すのは俺もするが、兎に角、たった一人で苛めにあっているのに、心臓の中に蛙でも飼っているらしく、つまり蛙の面にシヨンベン、恐ろしい程、平然としている強心臓の持ち主でもある。もちろん、人妻であるが、ナンパするのは、絶対不可能、あり得ない女性だ。

因みに、仲井さんが驚いて言っていたが、この徳香お嬢さんは、若い頃、自分で、つまり夫にも言わないで、裁判所の競売物件を落札して、家を買ったらしい。それも、何でも一人でこなしたそうだ。「普通の主婦には、出来ないよ、競売物件を買うなんて」、その話を仲井さんが言ったのを聞いて、

・・・あ・あれは、あれは・普通の女子じゃない・・・

そう思ったが、その時は何も言わないでおいた。仲井さんは、何故、今でも仲良くしているかと言えば、

「彼女、事務方の女性達と仲良いでしょ、情報が直ぐに彼女に伝わるんですよ」

つまり、女スパイとして、仲良くしているらしい。俺は、嫌だが、仲井さんは、仲井さんの考えがあるので、何も言う事は無い。

鉄仮面であり、あり得ないほどの自己中の藤原お嬢さんの味方は、

班の中では仲井さん一人、だから、敵の友達は敵ということで、敵としての矛先は仲井さんに向かったのは言うまでも無い。

この木村 卓也という男と仲井さんとは、木村が仲井さんの腹をどついてしまった「腹どつき事件」として書くことにする。この、事件は、公になる事は無かった。何故なら、俺が、間に立って仲井さんと話をつけたんだが、この事で何をとち狂ったのか、自惚れも天高く舞い上がって、班の中で一人浮き出た存在に陥ってしまったんだ、このアホ男、その、責任は全て俺の責任である事をこれから嫌と言うほど、知らされる事になるとは・・・・・・とほほほほである。

この少ない人数の我が班の構成員の中で、派閥と言っては語弊があるが、仮に木村派閥と言っておこう、木村派閥には、草渚 強という若者、年齢は27歳、鹿取 晋吾30歳という若者がおり、全員独身のメンバーだが彼らは、未だ幼く、考える事も幼稚であり稚拙で、一体どういう教育を受けてきたのかというくらいに全く人間が見えていない若者達であった。

実際は、異常に自己主張の強い性格、絶えず独善的に敵を造るという木村 卓也に引きずられて人間とはそう簡単な物では無いという事を、この後の展開でこの若者達は知る事になるが、その事は、もう少し物語が進んだ後に書く事になる。

もちろん馬鹿では無いので、年上の木村 卓也という人間の正体が徐々に分かり始めると、木村 卓也に引きずられて、全く、小学生のような幼稚な苛めに加担していた事の実態が分かり始めると、裏切られた思いと恥づかしい行為に後悔の念が、逆に木村 卓也への憎しみと軽蔑に変貌し、木村 卓也との決別になるのである。

紅一点藤原 徳香派閥は、残念ながら、徳香お嬢さんただ御一人である。だが、徳香お嬢さんと仲が良い、仲井さんを仲間と見て、彼らは攻撃したのである。だが、この仲井さんという初老の男を見誤ったのは確かだった。人生を乗り越え年齢50歳を越えた人間というのは、自らの幾多のその時々危機を乗り越ってきた人生の達

人だという基本的な認識が無い馬鹿者達の苛め等、彼にはなんの痛痒も無かったのは、当然と言えばあまりにも当然だった。

たかがアルバイトの非常勤が、小さな班の中で派閥みたいなものを造って、足の引っ張りあいをするなんて、小学校や中学校の餓鬼じゃあるまいし、まあ、呆れてものが言えないと思っていたが、この時点ではまだ、この木村 卓也という男を、応援していたのである。後悔先に立たずである。悔やまれて、悔やまれて、夜も眠れない日々が続く事になるとは・・・・・・である。

この木村 卓也は、俺の休んだ日を選んで、トラブルを起こす野郎だ。そして、季節が大いに関係してくるのである。この木村 卓也、現在では、サボキム、詐欺キムと陰口を叩かれているので、一々書くのも面倒なので、サボキムという事で、話を進める事にする。

サボキム事件簿

仲井 将弘という人間は、歳はいつているが見た目に女好きに見える。後から分かった事であるが、それは、真実で、彼の口癖は「今日もナンパだ」である。人間、最初の印象が、見た目から入るのは仕方がないが、仲井さんは見た目にも派手だから、と言ってそこらにいる派手な伊達男というわけでもなく、女好きな顔をしているように見えるだけだが、本人は違ふとそんな顔はしていない真面目な顔ですと言うが、他人にはやはり、好き者そうに見えるから仕方がない。

彼は、殆ど寡黙であり、無駄口は一切叩かない一匹狼の如き人物のように、最初は・・・そう見えた。俺がそう見えた以上に若者達には、虫が好かない人間、どうにも煙たい存在に見えたらしいから、サボキムの洗脳に依って、苛めには簡単に乗ったようだった。

だが、餓鬼同然の彼らの言葉の苛めには、彼は、黙殺・寡黙で通したから、彼等にしてみれば、尚更苛めたくなつたようで、それが、香取 晋吾の「泥棒呼ばわり事件」となつて現出するのである。

普通、人間はいきなり、他人を盗人呼ばわりはしない。例え、盗んだ事が歴然としていても、面と向かつて言いはしないで、警察とかに通報する。それが、基本的な社会のルールだったが、この若者 晋吾ちゃんは、仲井 将弘という人生経験豊富で海千山万の危ない男に、

「俺の、アノラック盗つたでしょう、返して下さい」と、ロッカー室で、仲井さんが出勤してきた途端に言つたそうである。

・・・馬鹿だよ、ホントに馬鹿だよ・・・考えが足りない・・・何を勉強してきたんだ・・・30を過ぎてるんだぞ・・・言うか・・・

その後直ぐに、俺のところに来て、仲井さんがやって来て、言つた言葉に、啞然として、ホントにそう思つた。

「稲垣さん、香取君に泥棒呼ばわりされたんですけど、どうします？」と、平然と言つた言葉に、

「な・何いゝどう言う意味です？泥棒つて？」と、聞いていた。

「さつきロッカールームで、いきなり僕のアノラック盗つたでしょ、返して下さいと言われたんですけどね」と、又、平然とした表情で言つので、

「ア・アノラックを・・・盗つたつて言つたの香取君が、・・・あいやゝ」

「昨日、同じ柄物の雨合羽を着ていたのを見たらしく自分の雨合羽が無くなつたらしくてですね、俺が盗んだと言つわけですよ、どうしましょ」と、表情の無い顔で言つた仲井さんに、

「仲井さん、そ・それちよつと待つて下さい、アノラック・・・アノラック」と俺は、会社の机のまわりとか見渡すようにアノラック

を探したら、直ぐ目の前に、同じ柄物のアノラックが、棚の上にあるではないか。

「有った、これ、これ香取君の物だよ、間違いないあいやくなんて事を」

実際にあの時は、相当に慌てたんだ。仲井さんが怒って、名誉毀損とか言って上に報告でもしたら大事になる事は明らかだったから、直ぐに、仲井さんに

「仲井さん、ちょっと、こちらへ」と言って、廊下に誘って、言ったものだ。

「いや、仲井さんこの件、俺に預けてくれませんか、俺から、注意しておきますので、何とか我慢してくれませんか？」

「良いですよ、それでここで騒いでもしょうが無いですから」と言つて、仲井さんはそれ以降、いつもの寡黙な男に戻っていた。

昼休みに、俺は、香取君に言つたものだ。

「なんで、簡単に泥棒呼ばわりしたの？」と呆れて言つと、彼曰く、「済みません、……仲井さん……普段……着た事の無い……同じ柄のアノラック……着ていたので……それで……事務室に置き忘れていたなんて……済みません」と、相当に後悔している表情を見せて言ってきたので、

「あのな、言つて良い事と悪い事があるよ、いきなり泥棒呼ばわりすれば、誰でも怒るよ」と、言つて聞かせる。

「はい、つい……感情的になつて……盗つたとばかり思つてしまつて……」

「盗るわけ無いだろ、同じ会社の支給品だよ、直ぐに分かるだろ、全く馬鹿だよ」

「仲井さん、どうする積りでしょう」と、ピンとはずれな言葉を聞いて、

「馬鹿、……先ずは謝るのが筋だろ、名誉棄損なんだぞ、誠意を持って謝る、それからだよ」と、怒りの声を出して見せた。

鹿取 晋吾という若者は、洗脳されていたのである。つまり、いちいち名前を書くのは面倒なので、木村 卓也の事を、キムタクと呼ぶことにする。世の中には、読まれ方がよく似た名前や、同姓同名がある、あまり深い意味はない、キムタクが絶対正しいと信じてしまつて、仲井さんを盗人呼ばわりをしてしまつたのである。自己チュー徳香お嬢さんはキムタク一派の敵であり、敵と仲の良い仲井さんは、敵と、日頃悪口陰口を叩いていたに違いない。全く、何をとち狂つて言つてしまつたのか、日頃、仲井さんを完全に悪者にしていたからの結果が、後先考えずに言つたのであろう。

この「泥棒呼ばわり事件」の後、香取 晋吾君は仲井さんに詫びを入れたのである。当然である。謝つた香取君に仲井さんは、「気にしないよ」と、ただ一言言つただけで、この出来事は終わつたんだが、キムタクの本性がいやが上にもこれから現出していくである。

さぼりの端緒

このキムタク、入つた当初、ビルの裏階段から転げ落ちて、怪我をしたのであるが、初めは、全然疑つていなかったのである。キムタクは、仕事中の怪我だからと言つて、「労災申請」をして認められ、一か月と10日休んだのである。この事件で味を占めたキムタクは、これから、数々の理由をつけて働かず金を盗ろうとするのである。この怪我は、班の中では誰も当初は疑つていなかったのであるが、現在、誰もが、「アイツは、自分で転げたんだ、自作自演だ」と、思っているのである。

兎に角、次々、起こるのである、病気が、怪我、が。それも、全部、嘘なのである。追つて、書いていく事にする。

このキムタクと言う人間は、弱い者苛めをする男だと言う事が後

から知った事である。俺は、会社を退職してから真面目にパチンコで一日を過ごしていたが、あまりに熱心にパチンコをやり過ぎたお陰で、女房に内緒で貯めていたなにがしかの金員が、風邪と共に去って行っただのは事実だ。パチンコ屋のあまりに酷い仕打ちに、昔の映画で有名な、

「シェーンカールバック」みたいに、

「マナー・プリーズカールバック」と、日夜、声に出さないで叫んだのである。

だから、ギャンブルやパチンコ等という悪魔の悪行を改心して止めようと決心して、折角務めた会社の班の若者、木村 卓也を立派な社会人に育てよう……としたのが、全ての間違いだったのである、結論を言えば、全て俺が悪い事になる。

これから起こる数々の事件の前半部分は、何とかキムタクを庇ったのである、キムタクの人間性等知りもしないで、事あるごとに庇護してやったのである。それが、増長させてしまった一因であるのは、論を待たない。

このキムタクと言う人間は、この会社に勤める前に、福祉の大学を出て、福祉関係の職についていたらしい。彼の口癖は、

「俺は年収500万の福祉関係の老人ホームに勤めていたんだ」だと、事あるごとに、誰彼となく自慢するので、

「そんな事を他人に言うな」と、何度も、何度も言っただが、キムタクは、口にチャックを絞めた事が無い。兎に角、自慢話が、好きで、

「俺には、彼女がいたけど、振ってやったんだ」と、誰彼となく振ってやっただと、自慢するのである。

仲井さんが、俺に最初の頃にこう言っていたんだ。

「あの木村って馬鹿じゃね？の、40近くの男が、結婚も出来ないで、同じ話を何度も何度も言っただ、俺は年収500万、静岡の女を振ってやっただって、一緒に仕事をする皆さんに、日替わりで同じ

話をしてるんだそうだよ、何で500万も貰ってる仕事を辞めたの、何で、あのデブが女を振れるの？嘘こきやがってさ」と。

その通りである。仰せの通りです。

因みに、仲井さんが脳内出血で倒れて入院したのは、夏も過ぎた頃だった。脳内出血と言えば、半身不随になるのが、相場だが、この男、二か月の入院で生還してきたのである。不死身である。どこも異常が無いそうだ。本人がそう言うので、そうなのだろうが、確かに普通に今でも仕事をしているのである。

やっと生還して青白い病み上がりの仲井さんにキムタクが暴力を振るったのである。

「キムタク腹ど突き事件」である。これは追って書く事にする。

このキムタクと言う、表面的には愛想の良いと言うか、強いものには異常に媚を売る人間が実は、暴力的な人間であり、弱い者苛めをする人間だと言う事が分かったのは、随分後になってからである。後悔している。公務員生活を何十年と過ごして来た人間は、民間社会を、人間を知らなさ過ぎる。お公家さんのように、行儀正しく、正直で、律儀で、如何にも真面目な人間ですと、やりたくない演技を何十年と続けなければならぬ生活だ。少しでも、例えば、車で煙草を吸っているとか、我慢出来ずにちよつと木陰で小便などするものならそれを見た社会の立派な偽善者から支店に御通報がいくのである。

「どここの場所で、公務員が煙草を吸っているぞ、小便をする等けしからん、税金で食ってるくせにけしからん」と。

こんな事は毎日日常茶飯事で、有り過ぎるほど有るんだ。その誹謗中傷を、仲間というよりも、公務員はじつと耐えて我慢をしているのである。そんな公務員生活が習い性になっていると、全ての人

間が、そうなのだと思ってしまうのである。だから、期間社員といえども、公務員的な人間なんだと思ってしまうところに、人生最大の不覚が在ったのは言うまでも無い。

木村 卓也は、年収500万、と、本人が言うのだからしょうがない、俺は信じてはいないが、彼はそんな福祉施設を首になったのである。何故なら、老人ホームか何かは定かでは無いが、福祉施設の職場に入ってきた、アルバイトの女性に、相当に酷いパワハラを日常的に行っていたらしく、その女性があまりのパワハラにたまりかねて、市役所の福祉課に訴えてしまったのである。当然その結果は、調査の結果木村のパワハラが認定され、彼は首となってしまった他に、狭い仙台の街で、福祉で飯を食っている業者や官庁経営の福祉施設に通達が回って、彼は資格が有りながら二度と福祉の仕事に就職は出来なくなったのである。自業自得である。その福祉施設では、辞めた女性に、一か月分のお金を払って、お詫びをしたらしい。

それ以来、福祉の仕事につけないものだから、何とかして食わなければどんな人間も死んでしまう。それで、仕方が無くこの職場に入ってきたらしい。そんなキムタクの人生も性格も知らないで、面倒を見てしまったのである。俺が、休みの時ばかり、問題を起こす野郎だ。

初めに会った人間は、へらへらして愛想が良いので、「この人間は良い人」と、思うのである。だが、初めて会った人間で、仲井さんという人間は、キムタクの本質を見抜いていた人間である。やはり、社会の荒波を潜って来た人間というのは、人を見抜く力がある。俺には、無いわけでは無いが、キムタクを一人前にしてやりたいという思いが、目を曇らせていたのである。

遅いけれど、ある時点で、気がついたのである。

キムタク派閥の若い連中と、一緒に俺も、仲井さんを敵視していたのは隠しようも無い事実である。なじまない人間であつた仲井さんという人間は、相当に警戒心、猜疑心というか、他人には心を許さない性質らしく殆ど話をしない、がだ、何故か女性、特にあの藤原徳香という自己中の女性と仲が良くいつも一緒にいるのである。

これには、誰もが、肉体関係があると思つていたが、仲井さんは自己中徳香お嬢さんの性格を見抜いていたらしく、絶えず私の話をするお嬢さんの話を黙つて聞いてやつていただけなのである。

そんな、表面的な事しか見えない、キムタク一派は、事あるごとに、徳香お嬢さんの仕事を邪魔するといふまるでガキがするような事を、木村派閥の若者達がやつているのを目にした、仲井さんが、香取君に、

「卑怯な真似をするな、ガキじゃあるまいし」と、ロッカールームで言つたそうである。

その通りである。班員として互いに連絡しあい、助け合う仕事なのに連絡しようとした徳香お嬢さんの電話に出ないで、自己中徳香お嬢さんを困らせるなんて、その話を聞いた時、俺は啞然としたものである。30前後の若者達のする事では無い。

そんな事を聞いても、俺は、若者達を庇つていたんだ。愚かな事をしてしまつて、その結果が、キムタクの胸倉を掴むという「キムタク決別事件」になつて行くのであるが、それは後ほど書く事にする。

あの階段で滑り落ちて、怪我をした。休んでも給料を貰える労災。保険屋さんからも保険金が貰える。そして、キムタクには、福祉の知識がかなりある。もう、お分かりだろう、真面目に働く意欲は無くなつてしまつたキムタクは、どうすれば働かないで金を稼げるかばかりを考え始めたのである。その結果が、「サボキム」という仇名になつたのである。

この会社は、お優しい。どれほど、休んでも、病欠扱いなのである。本当に病気なら分かるが、仮病、偽病、嘘病、分かっているのに、辞めさせない会社なのである。どれほど、迷惑をかけていても、期間雇用を打ち切らない会社なのである。拳句に、キムタクは、「組合員」になったのである。自己防衛本能なのであるが、社員で無い人間が組合に入るとは恐れ入谷のサボキムである、会社を首になった時の保険の積りなのである。心底が、見え見えでいやらしい男である。

仲井さんは、サボキムとは呼ばないで、現在は「詐欺、サギキム」と呼んでいるが、一昨年の、腹ど突き事件の後からは、「MR・M」ミスターエムと隠語で呼んでいた。

「仲井さん、ミスターMって誰です？」と聞くと、
「決まってるでしょ、あのデブ、ほら今流行りのメタボ、メタボの意味」と言ったのを聞いて、俺は、キムタクを痩せさせる事にしたのである。もちろんキムタクには、そんな事は言っつわけが無い。

80キロを軽く超えていた体重を落とすのに、キムタクは三カ月かかった。確かに、13キロ体重が落ちた。デブの人間は、「食べるのが早い」、齧らないで一気に呑み込んでしまう。そして、何よりも、食べる。食べて痩せるなんてのは、出来る分けが無いに決まってるのに、やせ薬を飲んで安心して、食う。

三度の食事以外に、10時の間食に、三時のケーキに、寝る前のお休み腹ごしらえ、どうです、これで痩せるならデブは世界中からいなくなるに決まってる。だから、先ずは食生活を変えさせたんだ。食堂で食べるのは、蕎麦ばかりで油抜き、間食やデザートは無し。キムタクは俺の言う事を実行して、食いながら痩せたのである。

痩せて、自慢が………始まったのである。

自慢する人間ほど、嫌なものは無い。自慢が、始まったのである。

あのいつものへらへら顔で、会う人間誰彼となく、

「13キロ痩せたんですよ、ベルトこんなに切りました」と、繰り返し繰り返し同じ事を言い出したのである。エレベーターに乗った人間にさえ、自慢話をし始めたのである。

確かに、痩せた。痩せたは良いが、車に同乗した班員誰彼となく、同じ自慢話を飽きもせず毎日、毎日繰り返すのだから、誰も嫌になり出したのは言うまでも無いが、そこはそれ、班員は大人だから何も言いはしない。

うんざりだ、と、誰しもが思っていた。だが、未だ、俺は、味方をしていたのである。罪万死に値する。

「不埒な悪行三昧退治くれよう桃太郎」とは、この時点では、いかなかったのである。痩せた、痩せたのは、確かに、キムタクの努力の成果だが、指導したのは俺だったんだが、その事はすっかり忘れて何もかも自分で考えてやったと言いだしたのであるから、始末におけない。

・・・まあ、痩せて、数値が普通になったんだから、結果良しでしょう・・・

自分で、折り合いをつけるしかなかった。これで、止めておけば良かったのに、庇っていくのである。まるですり鉢の底を、いつまでも這い上がる事も出来ないで、ただただぐるぐる回っている事に気がついたのは、相当後になってからだだったとは、恥ずかしくて、恥ずかしくて、糞溜めに頭から落ちてしまったような気がしている。今日この頃である。

このキムタクが、天敵徳香お嬢さんに向かって、怒鳴り散らした事件が起こったのである。鳩ポッポパック集荷センターの広い事務

室の中で、女である徳香お嬢さんに大声で叫んでどなり散らしたのである。

普通、社会人一般の方々は、公衆の面前でましてや社内で、よりによつて女性を怒鳴ったりしないと思うが、このキムタクは一人立ちあがつて大声を出し続けたと、次の日に出社して香取君に耳打ちされたのである。何が、原因になってキレたのか、誰にも分からない事だが、確かに徳香お嬢さんに罵声を浴びせたらしい。ところが、この自己中徳香お嬢さんは、座ったままで薄ら笑いというか冷笑して、キムタクを見続けていたそうだ。終いには、

「藤原さん、何を笑ってるんだあゝ」とか、

「そんな目で恨まないでくださいゝ」とか、

「応えて下さい、俺を無視して馬鹿にするなあゝ」とか、

最後は、完全にビビっていたらしい。キムタクが事件を起こすのは、季節の移り変わりである。丁度、夏から秋に向かつての時節だった。言つては悪いが、キムタクは自分で鬱の薬を服用しているとか、血圧が高くて、降圧剤を飲んでいるとか、いつも自慢しているである。普通、そんな事誰もが聞きたくは無いし興味も無いが、キムタクは同情を欲しいらしく、兎に角、いつも同じ話を繰り返す人間なのだ。この徳香お嬢さんとは、初めの頃は、仲が良く、ラーメンとか蕎麦とか食べに言っていたらしい。それが、ある時に、徳香お嬢さんに、

「俺は、もう貴女とは付き合わない、強い方に付く」と言つて、袂を分かつたと聞いている。何故そうなのかと言えば、班の中で、藤原 徳香と言う女性と仲が良いキムタクが言葉の苛めにあつたからである。

「ノロキム、早く仕事をしろよ、仕事遅いだろ」とか、

「ノロキム、ちゃんと連絡しろよなあゝ」とか、未だ俺が入社していなかった班の連中に、散々馬鹿にされていたそうだ。

馬鹿にされる原因は、徳香お嬢さんと仲が良かっただけでは無く、本

人の行動能力そのものに向けられていた事もあるのである。何度無く、ミスを繰り返すキムタクに班員は、見下げていたのである。犬という動物は、人間に飼われた瞬間に、その家の御主人様が分かるし、犬は、家の人間を序列化するという。赤ちゃんが生まれると、赤ちゃんより自分が上だと考え、赤ちゃんを噛んだりして怪我をさせる事があるから、赤ちゃんに犬の頭を叩かせたりして、序列を一番下位に下げるのである。つまり、犬は社会性がある動物なのである、もちろん人間もそうだ、だから、キムタクが藤原 徳香という女性と縁を切って、今まで苛めていた人間の軍門下った瞬間にキムタクは、序列が下位になってしまったのである。

強い者に弱くて、弱いと見たらとことん苛めに入るのが、キムタクの本質的人間性なのである。だから、後から入ってきた仲井さんは、軟弱なナンパ男に見えたのだろう、仲井という人間の本性も知らないで、威圧したのである。事有る毎に、ターゲットにして自分の下に置こうとしたのであるが、甘い。

仲井さんが、昔何をして来たのかは知らないが、優しそうで女好きいつもナンパしていそうな雰囲気顔をしているが、そうは烏賊の金玉、頭に黄な粉、とてもキムタク如きに太刀打ちできる半端な人間では無い。それを、知らずに、退院してきた仲井さんの腹をどついたのである。

「檜榔さん、大変ですよ」言ってきたのは、草凧 剛志という未だ20代の若者であった。午後の集荷に出発する時間は、だいたい午後の三時過ぎで、出発の準備が始まっていた。徳香お嬢さんは俺達より先に出発をしまっていたのである。それも、コンビニ届けなければならぬアマゾンの商品を忘れて、出て行ったものだから、発着でそれに気づいた仲井さんが、携帯電話で徳香お嬢さんに電話で知らせようとしたのである。ところが、キムタクが、

「止める、何も連絡する必要は無い、自分で気がつくまでほっとけ」と、仲井さんに向かって非礼な口を聞いてしまったのである。当然、

「馬鹿野郎、仕事なんだぞ、何を言ってるんだ」と、仲井さんが返すと、

「俺は、高校時代に暴れてたんだよ、アンタなんか怖くないんだ、その携帯寄せ」と、言っただそうだ。

「何するんだ、」

「寄せえ」と言っで、仲井さん所有の携帯電話を勝手に取り上げようとしたんだそうだ。

・・・馬鹿だ全くアホだわキムタクは・・・

キムタクの本性がここで露見したのである。仲井さんがそんな馬鹿な事を聞くはずもないではないか、当然言う事を聞かない仲井さんに腹を立て、

「上に報告しても構わない」と言っで、仲井さんの病み上がりの腹をどついてしまったのである。流石に怒った仲井さんと殴り合いになるところを、一部始終を見ていた別の課の課長代理が、止めに入っで一大事にならなかったと後から聞いた。そんな出来事が在ったとは知らずに、あの日は仕事に出発してしまっていたのである。

次の日の朝にいつもの6階にある食堂でコーヒーを飲んでいるところのに、草風君が俺の傍にやって来て言っただのである。

「木村さんが、仲井さんに暴力を振るっただんです、それで・・・昨日・ロッカールームで着替えている俺に、暴力を振るった木村さんを支店長に書面で報告するから、その事、稲垣さんに伝えておいて下さいと、仲井さんが言っで帰りました、どうしましょう」と言っただ草風君という若者の顔には、仲井という人間が悪者だと思ひ込まれているから、当然だとの表情が出ていた。

「ば・暴力・・・何をしたんだ、木村が？」啞然として聞くと、

「何でも、軽く仲井さんの腹をついた見たいですよ、普段態度が悪いから当然ですよ」と言った言葉に、カチンときて、

「馬鹿っ、人に手をかけたんだぞ、暴力を振るっただ、大事になるんだぞ、例えどんな事情があろうが、手を出すとは何事だっ」と、怒鳴ってしまった事を、今でも覚えている。

「でも、普段から勝手な事ばかり、」と、怒られた意味が分からないらしく、

「馬鹿っ勝手な事ってなんだ、何もしてないだろ仲井さんは、黙って仕事にしに来て、黙って帰る、仕事もきちんとしているし、班員として最低の事はしてるだろ」と言つと、なんと、

「でも、藤原さんといつも一緒に、」と、返した言葉に啞然としてしまった。

「そのどこが悪いんだ、誰と仲良くしようが仲井さんの勝手だ、何を考えてるんだお前達は、ガキじゃあるまいし、どんな言いわけをしようが、手を出したってことは犯罪なんだぞ、馬鹿者が」怒りが、心を支配していた。

「・・・・・・・・すみません・・・・・・・・」

「・・・・・・・・一体この若者は何を考えてるんだ・・・・・・・・気にいらなからといって手を出すなんて最低なんだという事が分かって無い・・・・・・・・参ったな・・・・・・・・首になつてしまふぞ馬鹿者が・・・・・・・・」

「仲井さんが、俺に言ってくれと言ったんだな」と、先ほどの言葉が心にひっかかっていた。

「はい、昨日・・・そう・・・言っていました・・・檣瑯さんに・・・言ってくれと」

「じゃ脈があるかもしれない・・・今日は、仲井さん出番だよな」
「はい・・・」

「……俺に話してくれって事は……処理を任せるって事かもしれない……ならば……」

俺は、こんなアホくさい事には関わりたくなかったのは本心だった。しかしながら、班の若者達を何とかまとめているのを仲井さんは、しっかり見ていたのである。仲井さんは、揉め事を大事にするつもりは無いらしいので、俺に言ってくれと言ったに違いないと思って、仕事が終わって帰る時間に、

「仲井さん……ちょっと話があるんですが、付き合ってくれませんか」と、帰り支度をしていた、仲井さんに声をかけたのである。

「そうですね、良いですよ」

「じゃ、食堂にいきましょう」

待っていたに違いない。

「木村が、仲井さんの腹をどついたって聞いたんですが、」

「一階の代理の前でど突きましたよ、事実です、一部始終を、支店長に書面で報告しますので」と言った仲井さんの表情には感情が見えなかった。

「それは、ちょっと待ってくれませんか、木村が首になってしまっし、喧嘩両成敗になってしまいますよ」と、言った言葉に、初めて感情が見えた、怒りが見えた。

「ほう喧嘩両成敗ですか、じゃ、支店長に判断して貰いますか？」

「いや、言い過ぎました、大事にしないでくれませんかこのままでは、木村が……その首になりますから何とか穏便に……してくれませんか」と、頭を下げていた。

「……何で……畜生……俺はこんな事を言わなければならないんだ……全く……」

「稲垣さんがそこまで言うのなら、良いですよ、但し、条件は、詫

びを入れる事、それから俺に一切構わない事、そうして下さい、アホくさくてやってられないんですよ、まるで中学生のレベルですから馬鹿者達は」

「いやあーそう言ってくれて、助かります・・済みませんけど、これで勘弁して下さい」頭を又下げた。

「それで良いです、じゃ帰ります」と言っ、直ぐに消えてしまった。

助けなければ良かったと今では心底・・そう思っている。でも、あの時あの時点では、まだ木村を信じていたのである。直ぐにキムタクの本質を見抜いていた仲井さんと違って、俺は、木村という人間を見ていなかったのは事実であるから、今では悔やんでも悔やみきれないほど後悔している。

「腹ど突き事件」の後、木村 卓也という人間は、仲井さんに詫びを入れる事は無かったのである。なんら感謝の言葉を、俺にくれた事も無い。確かに、現在まで言われた事が無いのは事実だ。

何故なら、木村 卓也という人間は、これから数々の伝説を造るのであるが、一度として「済みません」という言葉を言った事が無いというか、奴の辞書には「済みません」という言葉は、初めから入っていないのであるから、不始末をする度に「嘘と強弁つまり言い訳」を繰り返していく事になるのである。

キムタクの人生は、「言い訳」人生なのである。最初の頃は、自分の不始末は、他人のせいにしていたが、班を出されて一人仕事になった途端に、他人のせいにするわけにもいかず、責任は、「台車」にあると強弁した、昨日の不始末には、正直笑ってしまった。

キムタクは最初に「言い訳」から入るのである。昨日の不始末の原因は、「台車」が小さかったから、荷物を全部集荷出来なかったと言ったそうである。集荷センターの代理が頭にきたらしく、俺のところに来て、

「集荷漏れを、台車のせいにしやがった、あの馬鹿」と言った言葉

に、昨日は、ほんと呆れたのは言うまでも無いが、現在では誰もが、キムタクの本質を知っているから、笑いのネタにしかない。

昨日、キムタク事件簿の一つ「個人攻撃事件」の概要を、エレエターで隣り合わせた藤原 徳香お嬢さんに尋ねると、言うわ言うわの、自己正当化の話が止まらない。

「何で、あの時木村が徳香さんを怒鳴ったの？」

「あゝあれはね、仕事終わって会社に戻ったら、代理から集荷に行くのに同乗してくれと言われたのよ、ほら、路駐が出来なくなつて必ず二人乗車で行くようになったでしょ」

「うん、で・・・」

「だから、自分の仕事が終わってるから、命令だし同乗して行つたんだけど、木村にも、香取にも、草凧にも電話したんだけど、電話に出ないのよ、何度も電話して連絡しようとしたんだけど、電話に誰も出なかったのよ、」

「はあゝん意地悪したんだな・・・馬鹿者達が・・・で？」

「だから、次の日の午後の時間に、会社にいた木村に聞いたのよ」
「で・・・？・・・」

「昨日、携帯電話に何度も電話したんだけど、どうして出無かつたんですか？つて、聞いたら、気がつかかつたと言われたので、カチンときて、アンタ、嘘つかないでよ、携帯の着歴見ればわかるでしょ、あの時間どこにいたのよ、言ってみつ、つて言ったら、急に、あの馬鹿、大声を張り上げて、藤原さん個人攻撃は止めて下さい、個人攻撃は止めて下さい、大きな声で怒鳴り始めたのよ、」徳香お嬢さん、思ひだしている。

「た・たつたそれだけで、怒鳴り出したの？」と、話を割り引いて聞いても、怒る理由が分からない。

「えゝ課長もいたし、他の班員もいたのに、何を言ってるのか分から無い程興奮してさあゝあの馬鹿、一人で騒いでさ、課長がやっと

止めたのよ、私は、座って黙って聞いて頂けよ」と、言った顔が笑っている。

・・・やはり、蛙の面にシヨンベンだわ・・・物おじしいというか、木村がビビるわけだ・・・

結局こう言う事らしい。

徳香お嬢さんが、自分の仕事を終わったから、残業代欲しさに自分から手を上げて別の班の仕事を手伝いに行ったと勝手に考え、木村派閥の若者達が示し合わせて電話に出ない事にして、無視したんだが、そこは徳香お嬢さん、やられたらやり返すど根性の持ち主、男である木村に、どうして電話に出なかったのかと問い詰めたので、キムタクは、ガキのような妨害工作がばれたと思ったらしく、逆切れて、

「個人攻撃は止めて下さい」と、言ったという事らしい。

それを見ていた、仲井さんに香取君が言われたらしい。

「卑怯な真似はするな」と。

聞けば聞くほど、幼稚な出来事である。これが端緒となって、徳香お嬢さんは、班から別の班に動かされたのであるが、動かすのはキムタクの方だったはずなのに、ゴマスリ野郎にすっかり騙されてしまった、課長だったのである。まあ、騙された言ったら語弊がある、つまり、何事も無く毎日の仕事が終わるさえすれば、非常勤等というアルバイトの事等、歯牙にもかけない、気にする必要も無いのである。

ここの鳩ポツポ集荷センターの課長は、一年限りのお勤めを果たすと栄転になるポストであるから、考える事は一つしかない。非常勤達には関わらない、話さない、何か問題が起これば全て非常勤の責任にして自己の安泰を図る、つまり、一年を無事に勤めあげれば

栄転なので、何もしないのが課長の仕事なのである。だから、一般の会社ではありえないような事が、ここでは、普通に行われているのである。

天敵

集荷センターにいる社員は、実は、他の課から、使い物にならないと余されてきた社員がほとんどで、実に多彩だ。真津元 順という40代の社員がいる。仇名は、「フリーズマン」。何故フリーズマンと陰口を叩かれるかというと、職場の作業場のある場所に立ったら、その場所から立ったままフリーズしてしまつて殆ど、動かない。固まつてしまつて、じつと一点を見詰めて一時間でも動かない人間なのである。この真津元 順なる人間でも、社員なのである。社員の身分は、保証されている。どんな、伝説を造ろうが、始末書くらいで終わってしまう、社員には殊の外優しい会社だ。

ある時、真津元 順という後輩と一緒に車に乗つて仕事をした時、聞いた事がある。

「真津元ちゃん、金貯めてるんだろ、幾ら貯まつた？」俺が、聞く
と、

「はい、4000万円位・・・です」と、応えた。

「ほう、何するんだ、その金？」

「ここの会社に長く勤めるつもり無いんです」

「じゃどうすんの？」

「老人ホームに入ろうと思つて・・・」

・・・ろ・老人ホームつて・・・未だ40そこそこだろ・・・な

に考えてんだ……」

あの時は、本当に驚いたものである。この真津元 順という人間の昼飯は、缶コーヒーにアンパン一個、毎日、毎日それで過ごしているの、ガリガリに痩せている。また、あの時、聞いて見た。

「たまには、御馳走食べたら？」と、聞いたら、

「はい、食べてますよ」と、直ぐに応えた真津元 順。

「寿司屋にでも行くの？」

「いえ、コンビニ弁当を食べていますよ」

「こ・コンビニ……弁当……」

この男、真津元 順は、独身である。結婚などする気も、否、出来るとは思っていないに違いない。それにしても、夕食の御馳走が、コンビニ弁当とは、金が貯まるわけだ。きっと、詐欺師の女に騙されて、金を盗られるに違いないと、今でも思っている。多分、童貞だろうと誰かに言ったら、確か、

「いや、あれをソーブに連れて行った奴がいるんだ」と言われた事がある。

この「フリーズマン」こと真津元 順は、社員である。社員である以上、責任ある仕事をしなければならぬはずなのだが、しない出来ない、無責任。間違いが多い社員として、他の課から弾きだされて、廻し廻され最後に集荷センターに来たが、ここは、何をして、最低の仕事をごなしさえすれば後はフリーズしても、誰にも文句を言われない職場で、素晴らしい程の天国だったが、彼には、このフリーズマンには、新しくやってきた同年代の社員で、課長代理の二之宮 一成という天敵がいたのである。この天敵が、この課にやって来たのであるから、天国から地獄に化したわけである。

この二人の争いは、後ほど書いていく。この二之宮という人間も他の課から、弾きだされて来たのである。俺が推察するには、この

後輩は、自己中心主義者、自分勝手、性格が陰険、他人の事等全く無頓着な性格だから、他の社員から嫌われて、出されて来たらしいと思っっている。

一般社会から弾きだされて来た人間が、非常勤として集まり、社員として、会社から余された社員が集まった集荷センター、正しくお笑い集荷センターなのである。

時給1000円前後の非常勤がほとんど、それ以上は上がらない給料システムだ。俺や仲井さんのような一線を退いた人間の働く職場なのに、何故かしら、20代、30代やサボキムのような若者が勤めている。それも、非常勤社員、期間雇用社員A・B、月給制社員等と言われて、目の前に社員という餌をぶら下げられて、働かされているのに、いつかなりたや社員様、そうやって、だらだら働いている若者達のなんと多い事か。

ここの職場は、生温い。ここの社員に、何と言われているか知ってるんだろつか、若者達は。

「アルバイト風情が」

「結婚なんか出来る分けが無いアホたれどもが」

「社会で使い物にならない連中だべよ」

「いい若い者が、20万位の給料で」

すっかり馬鹿にされているのに、利用されているのに、なんの努力もしないで、のほほんと生活している若者達。何も考えていない。考える事すら、していない。努力もしない。20代で、30代で恋人すら持てない、持てる分けが無い仕事場で、給料が安いと言って、残業代で稼ぐ。残業し放題の会社だ。

本店では、残業代を削れ、多すぎるとの指示がいつも出されるが、この職場には支店長はいるが、プラスマイナスを気にする経営者が

いないのである。

期間社員には、時間目一杯の仕事を与えない会社だ。何故なら、彼等に仕事を与えると、休む、辞めると思ってる節がある。課長の役目は、非常勤は、生かさず殺さず、兎に角、だからでも、その日の与えた最低の仕事を無事に終わらせる事なのだ。若者達には何も期待していない。そんな民間会社が、どこにある？あるわけが無いが、全国組織のこの会社は、それで、通用しているのである。ある意味で立派な民間会社なのだ。

集荷センターの中で見る若者達のだらしない歩き方を見るにつけ、もう、こいつらに言う事は何も無いと、いつも思ってしまう。だから、だから、少しづつ時間をかけて引きずるように小幅で前に進んで歩いて行く。

・・・なんて、覇気の無い、若者達らしからぬ歩き方をするんだ・
・・・

何度そう思った事か。

社会で働いている、同年代の若者達は、恋人も出来て、結婚して、子供を作ってる年代だろうに、ここの若者達は、結婚すら出来ないでいる。したくても、出来る分けが無いのである。こんなアルバイト人生で、人生一番稼げる時期を無策に浪費している事に気がつきもしない若者達。

民間での仕事場で、だからと仕事をしていたら、尻を蹴飛ばされるに決まってるのに、この職場は、許されているというか、若者達には、なんの期待もしていない、最低の仕事さえしてくれば、何も言う事は無いである。

ここの集荷センターは、はみ出し者達の集まりである。百人も集まれば、色んな人間がいるのは当然だ。その、若者達の中に、キム

タクがいるのである。このキムタクとか、特に2班の若者達は非常勤でありながら、自分が社員よりも偉いと思っっているから、自分よりも年齢の低い、途中採用社員・逢場 眞沙希という人間を、「逢場君」と、君づけで呼ぶのである。

・・・一体ここの職場どうなってるんだ・・・社員だべによ・・・何してんだ・・・

社員と非常勤が、「お友達」関係になってる珍しい職場だ。

この逢場 眞沙希という若者には、天敵がいるのである。それは、総務の電話取り次ぎ、つまり、通称コールセンターの女事務員「和多 明子」という年齢不詳推測54歳の独身女だ。事ある如くに、いつもバトルが始まるのである。この和多 明子という女性は、自殺未遂、通称「自傷自演」者で、二の腕に、ナイフかマサカリか何か知らんが、切った痕が、三本もある。傷跡を隠しもしないで見られる事に、快感を感じているのであろう、一般人から見れば非常に狂っている女だ。

それも、この女は、この年齢になっても、

「追っかけ女」なのである。推定年齢54歳にもなって、「追っかけ」をしている女なのだ。

誰をというと、

「氷川 清」

「ガクト」

「マッスルの男」

だそうだ。

バトルの原因は、決まってるんだ。この和多 明子なる女性が電話の応対をしているという事がそもその間違いなのだ。

例えば、こうだ、お客さんから集荷以来の電話が有ったとしよう、この女性が応対すると、こうなる。

「仙台第二高校ですね、電話番号は、a a a - b b b - c c c c、住所は、仙台市青葉区上杉3丁目d d d e e eですね」と、受けるわけだが、逢場 眞沙希社員に集荷以来をする時に、こうなるのである。

「仙台第三高校、電話番号a b a - b b b - c c c d、住所は、仙台市青葉区上杉d d a - e e e」

逢場 眞沙希という社員は、当然、電話を信じる、信じるのは当然だ。信じて、集荷に行くと、

「そのような依頼はしていない」と、当然言われる。言われた、逢場社員、怒髪天を突くのである。

これは、一度では無い。逢場君は、最大の被害者なのである。そして、この集荷センターでは、被害者がかなりいるのである。

お客様の、

「名前も違う、電話番号も違う、拳句に住所も違う」

どうして、くれるんだ。何で、こうなる？

会社に戻った、逢場 眞沙希君は、和多 明子電話人に、顔を真っ赤にして、怒りをぶつけるのである。

「和つ多つさーん、しゅ・集荷先いーどこですかっー」
もう声が尋常では無い。部屋全体が振動するように叫ぶのである。
だが、

「第二高校ですけど、」と、蛙の面にシヨンベンだ、全く平気だ。
これでは、叫びたくなるのは、理解する。

「ち・ち・が・うだろーいっ行つてきましたよおー、第二
高校にっー無いって言われたんだあーどこですか、どこ・
どこなんですっ・何でいつも間違うんだあーどこなんだよ・
電話とったのあんたでしょ」もう、血圧が200を越えている位に
顔を真っ赤に染めて、怒りまくってる逢場社員だ。いつか、脳内出
血だな。だが、

「は・はい、で・でも、でも・た・確かに、そ・そう・いつ言つた
んですけど、だ・第二高校だと」と、平気だ。

間違つた貴方が悪い、私は全く悪くは無いという表情を見せるか
ら、尚更、逢場社員はヒートアップするのである。

「馬鹿っ違つだろ、無いって言われて来たんだぞっ、どこだっああ
ー」

これで、集荷に行けるわけが無い。だが、現実には、この女性が、
電話を受け取るのである。あり得ない事が現実にあるのであり、存
在しているのである。

では、何故首にしないのか？

答えは、分からない、である。このような、意味不明な女性にも、
お優しい会社なのである。

この和多 明子と逢場社員の抗争は毎度の事で、誰もが、

「あゝ又始まった、今度はなんだべ」と、完全に無視しているが、
会社の上司たる二之宮代理は、ここは、俺の出番だ、との強い責任

感で和多 明子電話当番に説教というか、ねちねちと苛めが始まるのである。この二之宮代理は、一時間もねちねちと説教をするのである。二之宮代理は、和多 明子の天敵なのである。ねちねちいじめの最大の被害者は、真津元 順社員と和多 明子電話担当なのである。当人達の恨みは、毎回蓄積され、いつか恨みを、まあ逆恨みなのであるが、晴らそうと思っている御両人だ。その二之宮代理に、失敗を責められ、和多電話担当が、「土下座」をして謝ったのである、当然、多数の人間がいる部屋で。ところが、何度も同じ失敗を繰り返すのである、この、和多なる女性性。

もう一人、和多 明子を天敵というか、傍にも寄りたくない男がいるのである。
それは、

仲井 将弘・・・という男である。

なんと、仲井さんにセクハラを受けたと、課長に言ったものだから問題になってしまったというか、いくら女好きな仲井さんであろうが、あの和多 明子にセクハラする等、有るわけが無い、と判断した課長が、問題にできなかったので騒ぎにはならなかったのである。が、噂は直ぐに広まったのである。

仲井さんは、そんな事はあったなどと全く知らないで出社していたのだが、周囲の視線が可笑しいと気づいたらしく、藤原 徳香お嬢さんにそれとなく聞いたそうである。

「彼女、仲井さんにセクハラされたって、課長に言ったらしいの」「何イ〜ナ・なんだそれっ・・俺がセクハラしたってのか・・まさか俺には選ぶ権利があるぜえ〜」と、言ったと後から聞いた。「彼女、夢見る夢子ちゃんだから、あんまり強い事言っちゃ駄目なの」と、徳香お嬢さんが言ったそうだ。

後で、聞いたら、車で同乗した時に、仲井さんにこう言ったそう
だ。

「ねえ、裁判員制度って、どうなのかしら？」

「あ、裁判員制度ね、まあ、選ばれないから、気にする必要も無い
よ、それに選ばれたら、犯罪者は全員死刑だと言えば、選考されな
いから心配する事無いよ」

始まりが、そうだったそうだ。裁判員制度から、始まったそうな
んだ。何故裁判員制度を気にしていたのか、和多 明子なる女性が
？仲井さんも、変だなあと思っていたそうだ。ところが、話が進ん
で行くに従って、その理由が、分かったらしい。

「追っかけ」が出来なくなるといふ恐怖感に、心を奪われてしまっ
ているのであったそうだ。

裁判員に、もし、あたしが選ばれたら、コンサートに行けなくな
る。

これだあゝ・・・・・・これが、最大の理由だったそうだ。

仲井さんは、徐々に追っかけの話を聞いているうちに、東京のコ
ンサートホール近くのホテルは高いとか、あそこのホテルは良いと
か、近くでなければお金がどのとか、氷川 清とかガクトの話に
入って行ったものだから、こう聞いたそうだ、

「和多さん結婚していませんか？」

「していないわ・・清ちゃんがいるし・・」

「き・清ちゃん・・って」

「氷川 清・・私の大事な清ちゃん」

「何それ？」

「好きなおゝそれにガクトもね・・いつもコンサートに行くし、
会員なの」

話が進むに従って、いらいらしてきて、

「そんなに男が欲しかったら、国分町のホストクラブにでも行って男を買えば良いでしょ」と、言ってしまったそうだ。

分かる。その気持ち痛いほど分かる。セクハラ騒動の後で俺に、仲井さんが言っていたんだ。

「狭い車の中で、ホテルがどうの男がどうのって、ずっとその話ばかりだからさ、俺を誘ってるのかと思ってさ、俺にも選ぶ権利があると思って、言っちゃったの、百万円で男を買えば良いよって」これが、セクハラの原因になったらしい。仲井さんは、裁判でも何でも受けて立つよと言っていたが、不名誉な事になるのは確実だ、セクハラ事件は女が圧倒的に勝。仲井さんは、こうも言っていた。

「女に不快な目に合わせたとしたら、俺に対するセクハラは、どうなんよ、狭い車の中で、ホテルがどうの、男がどうのって繰り返し聞かされる俺の気持ちは、どうなんよ？」と。

確かに、そうだったらしい。仲井さんの、俺にも選ぶ権利があるという言葉は、全く正しい。

・・・俺も、絶対、嫌だ・・・第一、美人では無いし・・・魅力も無いし、自殺未遂はするし・・・歳も歳だし・・・やはり駄目だわ、男を追っかけているような、気狂いには何があっても近づくの嫌だ・・・触らぬ神に祟りなしだ・・・

ここの集荷センターは、社会から弾きだされた可笑しな人間達の溜り場、吹き寄せられて集まってるお笑い職場なのだ。

新メンバー

新メンバー

キムタクと徳香お嬢さんの事件の後、コンビニ二班から二人の人間が他班に移動された。もちろん徳香お嬢さんである。キムタクが残ったのは、会社の先輩である俺の顔を立てての事だろうと思っていた。

新しいメンバーが入って来たのは言うまでも無い。

年齢が還暦を過ぎた、佐久来 庄という人間である。この庄さんという人間は、静かな人間であり、仲井さんが紹介してこの会社に入ってきたのである。仲井さんとは、仲が良いのは言ううまでも無いが、仲井さんが、いつだったか、

「佐久来さんは、こっち系統のような気がするでんすよ」と言っただけ、

「何いーオカマなの？まさか・・・」と、言っただのを今でも覚えてい

る。
・・・オ・カ・マ・・・まさか・・・あり得ない・・・

ところが、驚いた事に、

「俺の乳を揉んだのは、彼でしたから」と言っただのである。

・・・ち・ち・乳・乳をもんだあ・・・まさか・・・

「乳いー乳って、仲井さんの胸を揉んだってえー言うの？」驚いて声が、ひっくりかえっている。

「俺も、あはあゝんって感じてしまったんですよー・・・へへへえーそれは嘘ですけど、男に揉まれた事は初めてですよ、焦りましたよ、あの時」と、何だかまんざらでも無いような表情をしている。「ほ・ホントかなゝ佐久来さん・・・まさか・・・嘘だよ・・・無い・無い」

「ほら、発着にいる若い男の子いるでしょ、必ずすれ違う時に、彼のお尻を撫でて行きますよ、彼」と、言われて、

「うっ嘘だろ・・・参ったな・・・」と、言うしかない。

「郷朗さんの、お尻も撫でたりして、」と言った言葉に、

「や・止めっ・・・やったら、殴ってやる・・・するかなゝいやゝどうにも無いよ・それは無い・・・」

「はははははゝゝ冗談ですよ、彼は、若い男の子専門見たいですから・・・はははゝゝ」と、何だかにやついている。

退職するまでの長い仕事期間に、オカマ的な人間は、職場にはいなかった。俺達の時代は、もしそうであっても、ひたすら隠す古き良き時代だったのである。ところが、現在、オカマ時代と言っているのか、ホモ時代と言っているのか、同性愛者の時代と言ったら良いのか分からないが、いる、確かにいるのである。大手を振って街の中を歩いている。特に仙台のあるコンビニの近くに、彼らの生息場所があるらしく、良く見かける。

「あらっオネゝ様あゝそうっだのおゝゝお」と言ってるのは、長い髪を金髪に錆らかせた、お・と・こ・である。

「うわっあゝゝアタシいゝうらやまつしいいゝゝ」とか、独特の言い回しを、コンビニ店内で発しているのである。挙句に、マツコデラックスばりの姿の男性が、尻をブルンブルンと歩く時に振

って歩くのである。本当の女性は、尻を振りながらは歩きやしないでも、あれは、そうやって歩いていた。

目に青葉 山ほととぎす 初カツオ・・・

「目に男、コンビニ言葉、街オカマ」って、句があの時直ぐに浮かんだのである。

「参ったな・・・車に乗ったら、一応注意しておこう」と、あの時の尻の動きが目に焼き付いている。

あの時以来、注意は怠らない。でも、そんなそぶりは一つも無いので、あれは仲井さんの冗談だと今でも思っている。が、一度、発着の若い男の子の尻を触っているところを見た事がある。

「佐久来さん、や・止めてくれませんか、いつも尻を触るのは、僕、そんな趣味はありませんから」とか、言っているのを聞いたし、確かに見たんだんだ。

コンビニの尻の蠢きに、尻触りに、暫く、頭から離れなかったのは事実である。

佐久来さんとキムタクの事件は、直ぐに起こったのである。このキムタクは、この後次々班員と揉め事を起こしていくのである。誰しもが、一日を何事も無く過ごせばそれで良いに決まっている。仲井さんにしろ、佐久来さんにしろ、もう良いだけ人生を過ごした人間である。今更、大欲、大望等持っていない年齢である、まあ、持っていたにしろ、この職場でアルバイトの身分だ、どれほどの事が出来ようか。

キムタクという人間は、同じ話を誰彼となく何度も、何度もしつこく繰り返し話す。

その典型話は、

- 1・年収が500万円貰っていた会社に勤めていた。
- 2・彼女がいたがふってやった。

前にも書いたが、「年収500万円」も貰っていた会社を何故辞めたんだ、普通は辞めるわけがないだろうに、それが自慢のネタになると思っているところに、思慮が無い事を自ら他人様にあかしている。

次に、「彼女がいたが、振ってやった」という自慢話も、恥も知らんと良く言いやがる。40を過ぎて独身、仕事は、期間雇用社員通称「天下の悲しきアルバイト」、挙句に、メタボで禿げている男に、彼女なんか出来るわけが無いだろう。「彼女がいてが振った」という自慢話、これが自慢話になるのか疑問だが、藤原 徳香お嬢さんに言わせると、

「40過ぎたアルバイトに娘を嫁がせるわけがないわよ、馬鹿じゃないの、振られたんだわ、当然よ」

「生活なんか出来るわけがないでしょ、アルバイトなんよ、私が親なら絶対反対するわ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・である。

この徳香お嬢さんも、何度も最初の頃、同じ話を聞いたと言っている。徳香お嬢さん以外にも、班員全員が、何度も何度も聞いたそう。うだ。車の中での仕事に、同じ話を何度も聞かされる事に、誰しもが嫌悪感を覚え始めていたのである。一年後に入ってきた新しいメンバーの若者は、遠慮が無い男である。年齢は33歳、独身頭が禿げている若禿げ青年、糖尿病で父を亡くし自分も糖尿病である、名前は愛馬 昌樹。趣味というか、生甲斐というか、命をかけてい

るのが、

「競馬」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・である。

この愛馬君、通称「競馬の愛ちゃん」「愛ちゃん」「愛ちゃん先生」「ギャンブラー愛」等と、班員の中で呼ばれている。仲井さんは、競馬をやりだしたのも、この愛馬君の影響からだっただし、佐久来さんも若い頃から競馬をやっていたらしく、三人集まれば競馬の話で盛り上がるのである。

・・・・・・・・お・俺は・・・・競馬は・し・しないんだ・・・・・・・・

と、いつも心に誓っているのである。あれほど夢中になった競馬を止めて本当に良かったと、思っているが、つい、口から手が出そうになる。だから、お馬ちゃんの話には加わらないでいる。この愛馬君という若者に仕事中に聞いた事がある。

「いつから競馬やつてるの？」

「大学の中からです・・・・」

「なんで覚えたの？誰かに聞いたの？」

「いえ、競馬ゲームで覚えました・・」

・・・・ゲ・ゲーム・・・・ゲームで競馬を覚えたって・・・・時代が変わってしまった・・・・・・・・

と、あの時心底思ったものである。

競馬はギャンブル、博打である。それをゲーム感覚で覚えるなんて、どうか世の中狂っている気がしたものである。

パチンコ屋や競馬場に、親子連れを良く見かける。日本の親は、大人と子供の世界を混同しているようだ。仮にもギャンブル場は、大人の世界である。子供なんか入ってはいけない世界なんだ。子供の頃から、ギャンブルを学ばせる親ってのは、どこか、狂っていると思うし、あまりにも非常識だと思うが、競馬場に行けば、必ずそんな子連れの両親がいる。拳句に、

「桃ちゃん、お馬さん何番買う」……………である。子供に、博打をさせる親ってのは、どうよ？

班の中で、もう一人隠れ競馬ファンがいる。草渚 強君である。この若者も、ゲームで競馬を覚えて現在でもゲームとしてJRA競馬を楽しんでいるようだ。金を賭ける事の無い、ゲームとして楽しんでいる。

競馬ゲーム、どんなものやら知らないが、仲井さんは近頃よく、草渚君にG1推奨馬を聞いているようだ。ギャンブルには、絶対は無いのであり、勝ちと負けしかない。

因みに、愛馬君の昼食は、毎日、毎日、毎日、同じメニューだ。それは、パン二個と缶コーヒーである。食べ物に、拘らない人間なのは分かるが、あれじゃフリーズマンと同じで、決して身体のためにはならないはずだ。拳句に、糖尿病だし。しかしながら、そんな食生活は止めると、言うわけにはいかない。

競馬に負けると、顔に出るタイプだ。一度、聞いた事がある。

「大学から競馬をやっていて、収支はどうなんだい？」

「高級車一台分くらい負けてます」

……………高級車……………一台って……………この若さで……………何百万もか……………

そう思った。

この若者、キムタクと同乗した時に毎回同じ話をされるのに、耐えきれずに、

「その話この前聞きました」

「あつそれも聞きました」

「それも聞きました」

キムタクは、話す事が無くなってしまったのである。同じ話には、すかさず、

「同じ話をしないで下さい」と、言って黙らせたらしい。

これを出来るのは、愛馬君しかいない。遠慮が無い男なのである。携帯で、競馬サイトを何時間も見ている人間には、浮世の事など遠い世界なのである。嫌なものは嫌なのである。但し、この愛馬君という人間は、常識人である事は間違い無い。仕事は真面目であり、頑固なまでに基本に忠実だ。時たま、その頑固さに閉口する時があるのもまた事実だ。

俺が、キムタクを庇ってやっている事は、班員は全員承知している事だから、小さな印鑑漏れとかは毎回毎日あるにも関わらず、誰も表立つては注意をする事は無かった。これが、そもそもキムタクを付け上がらせる事になったのである。

小さな子供が悪さをしたら、頭をガツンと殴るのが良いに決まっている。何かの本で読んだが、三歳までに、なんでも良いから、子供と約束事というか、決め事、例えば、ご飯を食べる時には、手を洗うとか、頂きますを言うとか、お母さんのお手伝いをするとか、兎に角なんでも良いから、決め事、ルールを決めるんだそうだ。その約束を、子供が守る事によって、大人になっていくに従って、日本人としての社会的常識人となるんだそうだ。普通の日本人として、普通の社会生活を送れる人間になるとか書いていた。

だが、可愛い、可愛いとばかりに、小さないたずらをして叱らないと、子供の心に、ここまではやっても叱られないという気持ちが芽生え、もう少しの悪さをして親の反応を見ると、それでも親は叱らない、じゃもう少し、これでどうだ、これではどうだと悪さをして親の反応を見る、親は注意も何もしないで可愛がつているうちに、子供は、もう手遅れのモンスターになっているらしい。

それが、キムタクであると思っている。ガキの頃から生命保険のトップセールスだった母親に連れ回され、甘やかされてきたものだから、今でも、マザコンそのものだ。叱られる事もしないで、ガキのまんま大人になってしまった男がキムタクなのである。だから、誰かに注意をされると、異常に熱くなってしまうのである。

だから、自分だけは絶対正しいのである。世間が、どう思つか等他人がどう思つか等、考えた事も無いに違いないと思っている。何か、自分がミスすると、それは、誰かのせいであり、誰かせいにする他人がいないと、今度は、物のせいにするのである。つまり、自分は絶対に正しいのである。

こんな、人間を庇っていたのは、俺自身の愚かさによるものであるのは、間違い無い。ほとほと、情けなまった近頃である。仲井さんや、佐久来さん達は、いち早くキムタクの性格、気質を見抜いていたのは、やはり、民間が長かったせいだろうと思う。

事件は、次々、起こって行くのである。

制服紛失事件

キムタクのさぼりは、あの階段自傷自演で始まり、今度は、腰痛事件で幕を開けたのである。勤めて1〜2年たったこの頃になると、班員は、俺もそうだが、キムタクの人間性を見抜いてしまって、奴

と仕事以外に口を聞く事は無かったのである。

挨拶連絡事項以外に、大概の班員は、横を向いたり目を閉じたりして、キムタクを見ないようにしていた。別に、キムタクを、村八分にしている等と言う事は無かったのである。

その中で、何故かだが、仲井さんには良く話しかけていたのである。普通、暴力を振るった人間には、何かと、話しづらいと思うんだが、キムタクは、仲井さんに離しかけるのである。

だが、この仲井さんは、全く適当だ。全く適当と言っていいのか、上の空であり、キムタクと話しているのでは無く、聞き流しているのである。適当に、返事はするのだが、その返事は決まって、「うんだ・そう・うだ、うんだ・・・」である。一応、返事をしていらいしいので、何回も話しかけるが、いつもの返事しか返らないのである。

話が合うわけもないのだが、誰にも相手されないと、仲井さんに話しかけるが、話は、全く弾まないで、直ぐにどこかに消えるわけである。

そんなある日、会社に出勤して朝の準備をし始めっていると、サボキムから電話があつたらしく、課長代理の北島さんが、なにか話をしているのが目に入った。電話が終わって、班員のいる机にやって来て、別に困った表情なんかしていない、笑いながら、

「木村君、腰が、痛くてこれから、病院に行くと電話があつたので、今日は休むそうです。ですから、今日は、再雇用の大野さんが一区の車に乗りますので、宜しく」と言って、さっさと立ち去って行った。

直ぐに、出社して朝の準備に忙しい班員が、次々、口々にしゃべり始めた。

「あいやゝキムタクが休みだってよ、あの馬鹿、さぼりに決まって

いるよ」と、佐久来さんは、いつもの聞こえるか聞こえないかのような、静かな声で言ったので、

「うんだっちゃ、昨日まで腰が痛いとか、なんか言ってたか、アイツ？」と、誰かに向かつてでは無く、俺が言うともなしに言う。「いえ、そんな事は一言も言っておりませんでしたよ」と、返してよこしたのは、顔がやけににやついている、香取君だった。

「急に腰が痛くなるわけが無いべや・・・」と言ったのは、草凪君だ。「いや、寝返りうつても、ぎっくり腰になりますよ」と、言ったのは、準備を終えた、お馬ちゃんの先生こと、愛馬君だ。

実は、俺自身、若い頃ゴルフのやり過ぎで腰を悪くして、長い間入院して、拳句に手術をした事があるんだ。骨を削った後遺症が今でも有って、膝が痛いし、脹脛が痺れて感触が無かったりしていたんだ。

あんなに好きなゴルフも、出来ないでいるくらい腰の病気については、誰よりも詳しい。

サボキムが次の日に、会社に出社してきた。腰の痛みなどどこ吹く風の如くに、何の動きもしないで平気で歩いてきたのである。大人の俺達は、なんにも言わないのが、ルールだと思っているのであるが、昨日の仕事を独りでしなければならなかった一区の担当者、お馬の先生、愛馬君は、遠慮と言う言葉は、彼の辞書には無いらしく、朝のミーティングの時間にサボキムに言ったのである。

「木村さん、もう腰は大丈夫なんですか？・・・そんなに簡単に治るんですか？」と、齒に衣着せぬ愛馬君。すると、すると、だ・・・な・何と・・・

「いや、昨日は足が痛くて・・・」と、自分の足を触りながら言ったので、全員、啞然として閉まって、サボキムに冷たい視線が投じられたんだ。がだ、愛馬君は、又、又追い打ちをかけてしまったのである。

「木村さん、昨日は腰が痛くて休んだのでは無いんですか？」眼鏡

の奥に怪しい光を浮かべて、愛馬君が言った途端に、
「あつ痛いいゝ」と言つて、腰を押えてうずくまったのである。

「……ば・バカたれが……あほだわ……こいつは……呆れた野郎だ……腰で休んで、足が痛いだなんて……嘘つきやがつて……」だから容赦の無い愛馬君に言われるんだ……

その日は、車に乗つて、二区の仕事をしなかったそうだ。腰が痛くて休んで、会社に来てみれば、足が痛くて休んだと、自分の言つた言葉が軽すぎて、なんて言つたか等ノープロブレム。三歩歩けば忘れる鶏並みの知能なのだ。

その日の帰りのロッカー室での会話は、こんな具合だった。

「あの馬鹿、腰が痛いと言つていたのに、足が痛いと言いやがつた、自分がなんで休んだのか、忘れたんだべ屋……馬鹿だわ……」と、にやにやしながら言つたのは、愛馬君。

「あいつ、明日は、腰の痛みがぶり返したとか言つて、休むよ、きつ」と、予言したのは、仲井さんだった。

「そ・それは無いですよ……来ますよ」

「いんや、賭けるか、絶対明日は休むよ、何せ、愛ちゃん先生に、見事に一本取られたから、辻褄合わせる為にも、絶対休むよ」と、仲井さん。まあ、誰も乗らなかつたが、

確かに、次の日……休んだのである。

ローテーションが決められている仕事だから、それぞれの相方は次の日から、単独での仕事となるのである。だが、こんな休みの取り方は、まだ、まだ、序の口なのだ。

サボキムは、こんなさばりを経験したお陰で、保険金詐欺まがいの、腰痛事件を起こすのである。それは、もう少し話を進めてから書く

১৮৮৮

それから、何日かして、事件は起こったそうだと聞いたので、につくき敵のパチンコ屋に行つて、一勝負をしたんだが、
 ・ ・ ・ ま ・ 負けて ・ ・ ・ こ ・ ・ ・ こずかい ・ ・ ・ 全部 ・ ・ ・ 置いてきた ・ ・ ・ なんだ。

女房殿に、一万円貰って、会社に来てみれば、早速、

「昨日、木村さん、病院に入院しましたよ、」と、仲井さん。

「はあ？ 何したの？」

・ ・ ・ にゆ ・ ・ ・ 入院 ・ ・ ・ つて ・ ・ ・

「はははゝゝ午前中まで、なんとも無かつたですよ木村さん、それが、午後のミーティングの時に、椅子に座つて動かなくなつてしまつたんですよ・・ははははゝゝ」香取君の顔にはすっかり侮蔑の色が浮かんでいる。

「う・動けなくなっただって・・・どうしたの？」

「いやですね、午前中に20?の荷物を持ったそうですよ、．．それで急に腰が痛くて動けないって、大騒ぎになったんですよ馬鹿だわ、あれは」と、鹿取君。

「こ・腰……足じゃなかったの？」と、呆れて聞くと、

「え、そうなんです・・・俺達の仕事って、荷物の取り扱いですよ、ね、たかが20?の荷物を持つくらいで、腰に負担がかかるとか、代理に言ったらいいですよ、」

「馬鹿野郎だわ、あれは、たかが20?の荷物で腰が悪くなるんだつたら、この仕事なんか出来るわけがないよ、全く何考えてるんだか、腰だつて痛くは無いんだ、嘘なんだ」全く信じていない仲井さん。

「嘘に決まっていますよ、この前、愛馬君に言われたので、無理矢理腰が痛くなったんでしょね、昨日、動けないと言って椅子に座っ

たままで、課長代理と総務課の代理二人で、椅子ごと一階まで運んで、運んでですね、タクシーで病院に連れて行ったそうですよ」と、香取君は呆れた表情をして言った。

「はあ……それで入院したの？」

「ほら、二日町にある、佐藤整骨院、あそこは直ぐに入院させるから、腰が痛いと言ったら即入院、あの医者は直ぐ入院させるから」と、言ったのは、新しく班員になった、巻かん南音なあと年齢63歳、隣の班からやってきた、……誰よりも、誰よりも我々を愛す……世界一の自己中心者である。藤原 徳香お嬢さんとは又、一味違った自己中親父である。

「さ・佐藤整骨院……有名だ……じゃ、自分で病院を指名したんだろうな」と、俺が言うと、

「そうみたいですよ、」香取君は、直ぐに応えた。

この腰痛事件で、キムタクは、保険金を取得したのである。休んだ月日は、約1・5月。

休んだ事で、平穏な日々が始まった事は、間違い無い。後からの情報で、休んで、いる時に、入院先から頻繁に出かけていた事が、段々分かってきた。偽の腰痛で、動けない人間が、寝ている事に疲れたらしく、外出をしていた事が、コンビニのオーナーから、聞こえてきたのである。

キムタクは、休んでいるからと言って、ただ、ただ、寝ていると言う事は無い人間なのである。休みの時こそ、会社での自分の営業成績を上げて、ずる休み期間を帳消しにして貰うというか、ずる休みを無い事にして貰うという、非常に、身勝手な思い込みをしているのである。その為にも、春夏秋冬のイベント商品セットを、何が何でも、数をこなす事が必要に迫られるのである。

これから、何度も何度もずる休みの度に、イベント商品例えば親

会社でやっている「季節限定ラーメンセット」2500円の商品を、休んでいる間に誰彼となく売って歩いているのである。

30〜60セットとか売っては、腰が痛くて入院している期間に、自ら得意げに歩いて会社にやってきては、履歴を残す為に端末に打ち込んで、売上金を現金を現金管理機に入金して、

「俺は、入院中にこれだけの営業成績を上げてるんだ」と言わんばかりに、威張って帰って行くそうだ。

キムタクの考えというか、誰かに言った言葉が、俺に伝わってきた。

「俺を、首にすれば、会社の損失だよ」と、キムタクが自慢して言ったそうだ。

それを聞いて、笑ってしまったのである。

仮にラーメン100個仮に売ったとしてだ、会社にどれだけの利益をもたらすんだ？

その事が、自慢で、自惚れて、首にならないよう保険の意味で、売り上げを伸ばす為に、

「俺があんたのお店の商品を買うから、あんたもラーメンセット買ってよ」と自分の金で、バーター取引をしてまで、売り上げを伸ばす。

その話を聞いて、啞然としたのである。

「たかが、ラーメン100個売ったからと言った、どれほどの利益を会社に与えているんだ。」と言ったのは、佐久来さんだ。彼には、ラーメンの件でキムタク二恨みがあるんだ。

佐久来さんとキムタクが組んで、仕事に行ったある日、佐久来さ

んが、コンビ二のオーナーに、

「オーナー、会社でラーメンセット販売中なんですよ、お一つ如何でしょうか」と、いつもの囁くような声で言くと、オーナーは、

「良いですよ、じゃ買いましょう」と、応えたのを聞いた、キムタクが、そのラーメンセットを、佐久来さんが商談したものを、即座に横取りしてしまったのである。キムタクは直ぐに、申込書を車から持ってきて、オーナーにサインして貰ったのである。

当然、オーナーはサインをしたのであるけど、サインが終わるともう用は無いとばかりに、キムタクが車に戻り、啞然として成り行きを見ていた佐久来さんに、オーナーが、

「佐久来さん、良いのか、これで」と言っただけ。

それは、そうだろう、誰が考えても、キムタクのやった事は、許せないだろうと思う。悪いと思ったオーナーが、

「佐久来さん、悪いから、もう一セット買っから」と言っただけ、くれ

この出来事が、有って以来、佐久来さんは、キムタクとは一度も口を開か無い事になったのである。

これを、

「ラーメン横取り事件」と、班員では呼んでいる。

制服紛失事件と人間模様

制服紛失事件と人間模様

我がお笑い集荷センターこと、「鳩ポツポパツク」センターには、全く呆れた人間達が、吹き寄せられているのである。その中で、特筆すべき人間は、誰あるう、チャンピオンは、もちろん世界にその名も轟く、「木村 卓也」メタボな男であるのは、異存がないが、このお笑い集荷センターの中には、伝説を造った何人かのアルバイターがいるのである。

その名前は、あまり大きな声で言えないが、千石 良人という30代の独身男性だ。この男、親と一緒に宮城県大河原市に住んでいるのであるが、何処か狂っているというか、社会一般的な常識がまるで無い男なのである。

キムタクは、嘘について会社を休むので有名だが、この千石と言う男は、

「風が強くなれば、会社を休む」である。

俺は、その話を聞いて、啞然としたものである。つまりこういう事だ。

「強い風が吹くと、列車が、止まって、通勤が出来ない」

就業規則には、万難を排して、出社する事と書いてある。だがだ、この千石と言う馬鹿者は、風が吹くと桶屋が儲かるでは無く、風が吹くと、電車が止まって、会社に通勤できないと、連絡して、その

まま休むのだそうだ。

・・・あり得ないだろ・・・こんな事って・・・昨日もそうだった・・・あれほどの風が吹くのは、夜のうちからお天気お姉ちゃん、可愛い顔して天気予報で喋りまくっているのに、いつもの時間どつりに家を出て、駅に行ったら、電車は止まって動かない・・・これでは会社に行けない・だから会社を休む・・・ご立派な三段論法だ・・・これの・どこに正当な、理由がある？・・・読者の皆様で・・・これをどう思います・・・

年に数回、風が原因で、簡単に休む男なのである。何故、早く家を出ない？何故、バスとか、違う方法で、仙台を目指さない？この男の弁だ。

- 1・家を出るのはいつもの時間だと決めている。
- 2・違った通勤方法は、したくは無い。
- 3・タクシーを使えば、一日分のアルバイト料が消えてなくなる。
- 4・同じ時間の列車にしか、乗りたくない。いつもの列車が、動かなければ、休むしかないではないか。

もう、書きたくも無い。それを、何度も、何度も繰り返す事をしながら、全然叱りもしないお笑い集荷センターの会社の管理者達。無責任この上ない管理職達だ。

だから、「お笑い集荷センター」なのだ。

台風シーズンには、風が吹くだろう、台風が来ているのが分かったら、朝早くに仙台を目指して、何らかの方法でやってくるのが、世間一般の常識だろうに、この馬鹿野郎は、そんな考えは全く無いのである。

人間が、休めば、誰かが、穴埋めをしなくちゃなくなるんだ。休んだ事で、他人に迷惑をかけているという認識が、無い、人間達の事をなんて呼ぶ、世間様では？

「馬鹿者、足りない、アホ、間抜け、非常識、病氣」未だあるだろうが、止めとく。

俺は、人間をそんな風にこれまで見た事は無かった。40数年勤めた会社にはこんな馬鹿者達は、ただの一人もいなかったが、この職場にやって来て、すっかり人間観が変わってしまった。

CVS班の中で浮き出した、木村 卓也事キムタクは、班員にすっかり嫌われてしまったのである。当然ながら、同じ話を何度も何度も繰り返すのであるから、嫌われるのは当たり前だ。自惚れた自慢話とか、振られた女の話なんか誰も聞きたいと思うはずもないではないか。

なんとなく、自分の周りから、仲間が去って行っただと感じているキムタクは、班の中ですっかり浮き出た存在になっただのである。班の中で浮き出たら、他の班があるとはかりに、隣の班員に誰彼となく俺達の悪口を言っているんだそうだ。この狭いお笑い集荷センターの中で、誰かの悪口を言えば、必ず、周り回って、悪口が聞こえて来るのは、誰にでもわかる事なのに、誰彼、構わずにCVS班の悪口を言っている。アホだわ、こいつ。

このキムタクと言う人間は、通常業務が終わって会社に帰ってから行おう仕事、例えば、コンビニの店員さんから、「鳩ポッパツク」の普通ラベルを持ってきてくれるように頼まれとか、シールを持ってきて下さい等と頼まれてきたしても、その準備は一切手伝わないのである。明日の準備や何日かの前の為のシールやラベルの準備などという仕事は、自分でやる仕事では無いと思っっているらしく、

班員が、その準備をし始めると、プイと一人で、班員が座っているテーブルから消えるのである。その度に、

「なんであれ、手伝わないんだ？」

「いっつも、逃げる」

「ははは……社員のつもりなんだべよ」

これである。

自分は、非常勤のくせに、社員になつたつもりでいるようだ、皆さんが言うのは、当たっているのかも知れない。兎に角手伝わないという現実、班員には、ずるい奴としてしか写らない、そんな班員の気持ちも分からないキムタクが、浮き出た存在になるのは仕方が無いのである。やはり、班制度の仕事を組まれている以上、お友達にならなくても、最低の義務だけは果たすのが、社会一般常識というものである。あれには、一般常識など全く無いのである。次の日の準備をするのは、同乗した片方の人間がやるのである。それほど、自分は偉いと思っている節がある。

ある日、一日の仕事が終わって、帰るまで時間があつたので、色々皆で雑談している時に、行方をくらましていた、キムタクがテーブル席に着いたのである。座ると直ぐに、全員が、ピタリと会話を止めてしまった。誰も、奴とは話したくないのである。

そんな毎日が過ぎていったある日、キムタクが、支給されていた制服を、上下着を紛失してしまったのである。それを拾ったのが、誰であろうCVS班の、元のつるんでいた若者、仲井さんを泥棒呼ばわりした、鹿取 晋吾である。

こうだ。

いつものようにコンビニに集荷に行くと、その店の店員さん鹿取君に、言ったそうである。

「昨日の夜にですね、これ、お店の前に落ちていたんですよ、服のようなんです、中を見ると、鳩のマークの入った見た事のある服でしたので、明日、来たら見て貰いましょうって取っておいたんです、これですけど」といって、渡されたそうである。一目瞭然、袋の中を良く見なくても、分かったそうだ。

「これ、内の会社の制服です、どこに落ちてたんですか？」

「外に置いてある、煙草の灰皿置場の近くに落ちていたんだそうです、丁度、内の店員さんが、何かな〜と思って広い上げて見れば、鳩のマークが見えたんだそうですよ、やはり、お宅様の会社のものですよね」

「そうです、ありがとうございます、これ預かっていきます」と言って、預かってきたという事だそうだ。

この制服を落としたという事件は、支店長まで行く事になってしまったのである。当然と言えば、当然なんだが、この制服を落としたのは、金曜日の夕方、PM：19：00の事だそうで、土曜日の午前中に発覚して、午前の仕事が終わって帰社して、誰の物かを調べたが、名前などどこにも書いていなかったの、課長代理に、報告し、制服を引き渡して手を離れたのである。

土曜日と日曜日は、キムタクは連休で休んでいたのである。普通、金曜の夜に、会社の制服を落としたら、その夜に会社の報告するか、次の日の土曜日の朝に、会社にやって来て、報告するのが普通なのだが、キムタクは、全然報告をしなかったのである。

そして、月曜日に出勤してきても、制服を落とした等とは、一言も言わないで、午前の仕事を終えて、帰社して、鹿取君が、皆の前で、

「いやあ〜昨日、金曜日の夜に落とした会社の制服をコンビニんさ

んの店員さんが拾ってさ、土曜日の朝にコンビニさんに集荷に行ったらさ、誰かが落とした制服を渡されてさ、中を確かめたんだけど、名前も書いてないし、そのまま、代理に引き渡したんだよ」と、言っってしまったのを聞いた、キムタクが怒りだした。

「それ、俺のだ、なんで俺に言わないんだよ、探してたんだ・・・」と、皆さんの前で言っただと。

どう、思います。

何故、それほど重要だと言えば、この制服紛失事件のその日つまり、金曜日の午後の全体ミーティングで、他社の制服を着た男が、小包の配達人だと言って、一人暮らしの若い女性の部屋に侵入して、強姦したというニュースがあったので、皆様も制服を無くしたり盗まれたり、しないように注意して下さいと、言われたばかりの、その日の夕方、落としてしまったのである、キムタクは。それも、二日間も、報告をしなかったのである。その間、もしも、その制服が使われて、泥棒されてしまったとしたら、会社の信用なんてがた落ちだろうに、反省もしないで、

「なんで言わないんだ、」と、怒り出してしまった男が、木村 卓也と言う人間なのである。

その拾った制服には、「名前」等はどこにも書いていなかったそうだ。誰のものか分からない制服を拾った香取君を逆恨みした奴が、キムタクだ。二日間も上に報告もしないで、しれっとごまかす積りが、ばれたものだから上役に呼ばれて大騒ぎ。支店長室に当然、お呼ばれしたわけなんだが、後から担当課長が

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5102p/>

嫌われ者

2011年10月3日22時25分発行